Review
［査読無し］ 総 説

保育現場における心理支援の内容と課題
ー国内文献の分析からー

Psychological support in childcare services: A review of Japanese studies

春日 文，田中 優，廣瀬 雄一，古田 雅明
大妻女子大学人間関係学部

Aya Kasuga, Masashi Tanaka, Yuichi Hirose, Masaaki Furuta
Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University
2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, 206-8540 Japan

キーワード：子育て支援，心理支援，保育園，幼稚園，こども園
Key words：Childcare support, Psychological support, Nursery school, Kindergarten, Children's center

抄録

本研究は保育現場として保育園、幼稚園、子ども園に着目し、それぞれの保育現場においてどのような臨床心理学的な子育て支援活動がなされているのか、その内容と課題について検討することを目的とする。具体的には、保育現場における子育て支援の現状について、これまでの研究を概観し、研究調査場所である保育園、幼稚園、子ども園ごとに文献を分類し、それぞれの保育現場における子育て支援の内容および課題についての分析を行った。対象文献は1991年から2020年の国内文献を検索し、該当する23件とした。子育て支援の内容と課題について分析したところ、全ての保育現場に共通する子育て支援の内容として、【専門家や外部機関との連携】と【巡回相談/コンサルテーション】と【気になる子どもの保護者支援】が見出された。保育園と幼稚園では【日常での保護者支援】と【気になる子どもへの支援】があった。保育園のみでは【保育士による心理相談業務】、幼稚園のみでは【未就園児の相談業務】があった。一方、子育て支援の課題に関しては、全ての保育現場に共通する課題として、【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】が見出された。保育園と幼稚園では【心理職（キンダーカウンセラー、発達相談者）の専門性向上への期待】と【子どもへの支援の充実】、保育園と子ども園では【巡回相談のあり方の検討】と【気になる子どもの保護者への支援の充実】があった。保育園のみでは【保育者への心理的支援の必要性】と【より多くの職種との連携の必要性】があった。子育て支援の内容と課題について振り返ると、心理職が様々な形で保育現場に関わっているとともに、より一層の連携を期待されていることがうかがえ、保育現場において心理職が貢献できる役割は大きいことが示唆された。

1．問題と目的

近年、保育園や幼稚園、こども園といった保育現場における心理支援の期待が高まっている。はじめに、保育現場における子育て支援の歴史的な背景を振り返ると、1999 年に保育所保育指針の内容が変更され、保育士が保護者との積極的な関係を作ることと、保育所での地域子育て支援を行う内容が盛り込まれている。また、幼稚園教育要綱（1998 年改訂）には幼稚園における子育て相談の必要性が明記されている。2000 年には、厚生労働省が策定した「健やか親子 21」において、子どものこころの安らかな発達の促進と育児不安の軽減などが課題としてあげられている。

2002 年には東京都文京区において区内の幼稚園と保育所に子育て支援カウンセラーが派遣され、2003 年には大阪府が府内の私立幼稚園にキンダーカウンセラーを派遣する事業を開始している。キンダーカウンセラー事業とは、臨床心理士等の資格を持つ心理職が継続的に園児・保護者や地域の保護者に対して心理的支援を行う活動である。ま

た、キンダーカウンセラーとは、小学校から高校に配置されているスクールカウンセラーの幼稚園版である[1]。キンダーカウンセラーの役割は、①保護者支援、②保育者支援、③子ども支援の 3 つがあげられており[2]、幼稚園において期待が高いキンダーカウンセラーの活動は、①保護者からの子育ての悩みに関する相談、②保育者からの子どもへの関わり方や発達上の問題に関する相談、③保護者からの子どもの発達上の不安や問題に関する相談、④子どもの行動観察、⑤保護者の悩みに関する相談があげられる[3]。現在もキンダーカウンセラーを導入している幼稚園数は増加しており、広がりを見せている[4]。さらに、同年の 2003 年に「次世代育成支援対策推進法」が施行され、次世代を担う子どもが健やかに産まれ育成される環境整備を目的に子育てを社会全体で支援するための体制づくりが進められることとなる。

このような流れから、保育園や幼稚園などの保育現場でも乳幼児期の子育て支援の必要性がより一層取り上げられることとなり、2004 年の中央教育審議会幼児教育部会において保育カウンセラー導入の提案がなされる。同年、東京都日野市が文部科学省の新しい幼児教育の在り方に関する調査研究の指定を受け、保育カウンセラーが試行的に日野市内の一部の公立幼稚園に配置されることとなる。中央教育審議会幼児教育部会では、保育カウンセラーの職務内容を以下のように示している。１）保護者への専門的援助、①乳幼児の養育者を対象として子育て相談等を受ける、②虐待を未然に防ぐための啓発活動、③グループ指導。２）幼稚園教員・保育所保育士への専門的援助、①保育の改善への心理面からの助言、②障害のある子どもの保育、③個に応じた指導と評価、④園内における子育て支援の進め方、⑤子育て相談のスーパーバイザー。そして、上記２つの職務内容を行うために求められる専門性として、以下の４つの項目をあげている。①カウンセリング技術とソーシャルワーク技術、②乳幼児の発達のつまずきとその援助の知識、③乳幼児教育・保育実践についての理解、④家族関係とその援助についての理解である。また、2005 年には、「発達障害者支援法」が施行され、発達障害を持つ子どもへの早期の発達支援、健全な発達と適切な保育・教育が受けられる配慮やその家族への支援が挙げられ、保育現場では発達支援に関連するニーズが年々高まっている。

このような歴史的な背景の下、保育現場においてキンダーカウンセラーや保育カウンセラーといった名称での子育て支援活動は広がりをみせており、近年では心理職に対して子育て支援に関するより一層の期待が高まっており、その期待に応じるためにも心理職が専門的知識を身に付ける必要があるだろう。富田[5]は、保育現場において、臨床心理士や臨床発達心理士が保育カウンセラーとしての役割を担っているのが現状であり、今後は保育内容を十分に理解し、保育の特殊性・独自性を活かした保育現場のニーズに対応できる保育カウンセラーの育成が必要であると述べている。また、小川[6]は、キンダーカウンセラーや保育カウンセラーといった名称が一つでないがゆえに同じ枠組みでの検討が難しいことや、保育現場であっても、例えば公立・私立幼稚園、大学付属幼稚園などの現場の違いによって共通する部分とそれ以外の部分があり検討が難しいことを指摘しつつ、実践活動やそこから得られた知見の構築が行いやすくなることが望ましいと述べている。さらに、保育・幼児教育の現場はそれぞれの特徴があり同じものではなく、地域・環境などの背景も考慮すると一つの型にはめる必要はないとしながらも、支援の手立てとして複数の枠組みが存在することは、今後の子育て支援に役立つであろうと述べている。

そこで、本研究では、保育現場として保育園、幼稚園、子ども園に着目し、それぞれの保育現場においてどのような臨床心理学的な子育て支援活動がなされているのか、その内容と課題について検討することを目的とする。具体的には、保育現場における子育て支援の現状について、これまでの研究を概観し、研究調査場所である保育園、幼稚園、子ども園ごとに文献を分類し、それぞれの保育現場における子育て支援の内容および課題についての分析を行う。

２．方法

2.1. 対象文献の選定

対象文献については、CiNii（NII 論文情報ナビゲータ）と J-stage（科学技術情報発信・流通総合システム）を用いて、1991 年から 2020 年の 30 年間に発表された国内の文献を「子育て支援」「心理支援」「保育園」「幼稚園」「こども園」「保育カウ

ンセラー」「キンダーカウンセラー」「気になる子」のキーワードで検索した。さらに、その中から、保育園・幼稚園・子ども園での子育て支援に関して言及している文献を抽出した。その結果、23 件の文献を分析の対象文献として採用した。

2.2. 分析方法

対象文献について保育現場(保育園・幼稚園・子ども園・保育園と幼稚園・保育園と子ども園)ごとに文献を整理し、「発表年」「研究目的」「研究方法」「対象者」「分析項目」「結果」について抽出した（Table1,2,3,4,5）。また、保育現場の子育て支援に関する文献の全体的な傾向を明らかにするために、「発表年」「研究目的」「研究方法」の 3 項目については文献数を算出した（Figure1,Table6,7）。次に、「子育て支援の内容」と「子育て支援の課題」の 2 項目について、項目に関連するデータが文献の文脈の中でどのように意味づけられているか検討するために、研究場所(保育園・幼稚園・子ども園・保育園と幼稚園・保育園と子ども園)ごとに質的な検討を行った。

３．結果

3.1. 保育現場における子育て支援に関する文献

本研究の条件に合った 23 件の文献を本研究の調査対象とした。研究場所ごとに文献を分類したところ、収集した文献の内訳は、保育園を対象にした文献は 6 件、幼稚園を対象にした文献は 8 件、こども園を対象にした文献は 1 件、保育園と幼稚園を対象にした文献は 7 件、保育園とこども園を対象にした文献は 1 件であった。本研究の調査対象文献の概要を Table1,2,3,4,5 に示す。

3.2. 研究の動向

対象文献の年次推移を Figure1 に示す。2005 年から始まり、その後、1~2 件発表され、2018 年に 4 件と最も多く発表されていた。研究目的については、発達障害や気になる子どもの支援の検討が最も多く 6 件で、次に保育カウンセラーの役割の検討が 4 件、コンサルテーションの検討、カウンセリングの必要性の検討、キンダーカウンセラーの役割の検討がそれぞれ 3 件、臨床心理士の役割の検討、相談員の役割の検討が 1 件であった（Table6）。研究方法は、量的研究が最も多く 11 件であり全て質問紙調査であった。次に質的研究が 7 件あり、このうち内容分析が 5 件であり面接調査が 2 件であった。そして、事例研究が 4 件、文献研究が 1 件であった（Table7）。

3.3. 子育て支援の内容と課題について

以下に保育現場ごとに行われている子育て支援の内容と課題」について分析した結果を示す。以下、コードは＜＞で、カテゴリーは【】で示す.

3.3.1. 保育園における子育て支援の内容と課題

保育園を対象とした文献 6 件に関して「子育て支援の内容と課題」について分析したところ、子育て支援の内容に関しては、【保育士による心理相談業務】が行われており、主に指導者層が担うことが多いことや、気になる子どもの保育に対して専門家による【巡回相談】が行われていた。また、【気になる子どもの保護者支援】に対しては心理師と保育士の協働による対話の場が組織全体の機能促進に繋がっていることや、障害児への支援として【専門家や外部機関との連携】をしていることがあげられた。さらに、最近では、保育カウンセラーの存在も見受けられるようになった。

一方、課題に関しては、【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】を感じていることや、【巡回相談のあり方の検討】があり、巡回相談は頻度が少なく専門家が保育者への教授という一方通行の関わりとなることが多いことや、保育士の専門家に対する依存が起こりやすいといった問題などが指摘され、【保育者の心理的支援の必要性】についても検討すべきであると述べられていた。また、気になる子どもは他の機関での支援に繋がりにくく、【気になる子どもと保護者への支援の充実】があった。さらに、保育カウンセラーは全国的に普及していないが、今後保育現場にとって必要な存在となると考えられるなど、今後、【より多くの職種との連携の必要性】が求められる可能性がみられた。

ｉ）　保育園における子育て支援の内容

以下に詳述する 4 つのカテゴリーが見出された。

（１）【保育士による心理相談業務】

【保育士による心理相談業務】が行われており、指導者層は保育士層に比べて子どもの保育に加え、＜心理相談業務＞に関わることが多く、指導者層の方が＜カウンセリングの技術や知識の必要性＞

を強く感じている状況がみられた。

（２）【巡回相談】

気になる子どもの保育に関しては、＜専門的な援助＞を行う【巡回相談】が行われていた。また、【巡回相談】を＜保育現場におけるコンサルテーション＞であると捉え、＜保育者と心理専門職との協働＞の重要性がみられた。

（３）【気になる子どもの保護者支援】

【気になる子どもの保護者支援】の取り組みについては、＜心理士と保育士の協働＞による対話の場により、＜保護者と保育士の関係性の発展＞や保育士の＜保護者に対する心情の気づき＞や若手保育士の気になる子どもの＜保護者支援力＞の向上につながり、＜保護者と専門機関との橋渡し機能＞が促進されるという、組織全体の変化がみられた。

（４）【専門家や外部機関との連携】

気になる子どもや障害児の支援、その保護者への支援において、【専門家や外部機関との連携】が行われており、主に障害児への支援として、通級指導等、他の施設で個別的な支援を行うといった＜他の機関での支援＞に繋げる＜他機関との連携＞がみられた。また、最近では保育園を頻繁に訪れて相談を受ける＜保育カウンセラー＞が保護者支援・子ども支援・保育者支援を行い、＜保育カウンセラーとの協働＞がみられるようになった。

ⅱ）保育園における子育て支援の課題

以下に詳述する 5 つのカテゴリーが見出された。

（１）【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】

保育士は、【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】を感じているが、時間がないことや情報がないために、保育士の＜カウンセリング研修への参加経験＞は少ない状況がみられた。

（２）【巡回相談のあり方の検討】

自治体や地域によって＜多様なスタイルの巡回相談＞が展開されており、個々の＜訪問者の経験や判断＞等に任されているのが現状であった。また、巡回相談は専門家が保育者へ教授するという＜一方通行の関わり＞であることも多く、巡回相談の回数が少なく定期的・継続的な支援が難しいことも指摘されていたため、【巡回相談のあり方の検討】があった。

（３）【保育者への心理的支援の必要性】

巡回相談において、保育士は専門家の助言を主体的に吟味せず受け入れてしまうなど、保育士の＜専門家に対する依存＞が起こる問題が指摘された。また、悩みを相談すれば専門家が解決してくれるという期待から、納得できない結果になれば専門家に対して不信感をもつという問題も生まれる可能性があり、＜複数の保育士で協議する仕組み＞を取り入れたり、保育士の対応に含まれる効果的な内容について専門家が＜肯定的な評価を行う＞など、【保育者への心理的支援の必要性】が見出された。

（４）【気になる子どもと保護者への支援の充実】

障害の診断のある子どもが他機関の支援を受けやすい一方で、診断のない気になる子どもは他機関の支援に繋がりにくく、【気になる子どもと保護者への支援の充実】が課題としてみられた。＜本当に繋がりたい保護者に支援がつながらない＞ため、＜気になる子どもの保護者への支援＞についてどう取り組んでいくかという点が課題であった。

（５）【より多くの職種との連携の必要性】

＜保育カウンセラー＞は全国的に普及しているとはいえないが、今後より一層必要な存在となると指摘されており、＜保育カウンセラー＞や＜心理援助職＞など、保育現場において今後【より多くの職種との連携の必要性】が求められる可能性があった。

3.3.2. 幼稚園における子育て支援の内容と課題

幼稚園を対象とした８件の文献に関して子育て支援の内容と課題について分析したところ、子育て支援の内容に関しては、保育カウンセラーやキンダーカウンセラー[1]による【コンサルテーション】の普及がみられ、保育観察、保育カンファレンスへの参加、子どものアセスメント、気になる子どもへの対応などが実施されていることがわかった。カウンセラーがカンファレンスに参加することで【専門家や外部機関との連携】が活性化していることが見出された。また、保育者は保護者

[1] 「保育カウンセラー、キンダーカウンセラー、カウンセラー、発達相談者、臨床心理士、心理士」の記述は、引用文献の表現をそのまま表記しています。

と園での子どもの様子を保護者と共有したり、個別相談や子育てに関する講演会などの【日常での保護者支援】も盛んに行われていた。未就園児の保護者の支援や園児確保の目的から、【未就園児の相談】を行っている園もみられた。

一方、課題に関しては、気になる子どもについて、子どもの状態を保護者に伝える上での具体的な方法を知りたいといった【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】がみられるとともに、時間的なゆとりがないことで子どもへの対応が十分にできないといった【子どもへの支援の充実】も課題としてみられた。また、キンダーカウンセラーによる保育観察、個別の指導計画への助言、子どものアセスメントは、いずれも、今後も実施を増やしてほしいことがあげられるとともに、キンダーカウンセラーに子どもの発達に関するより一層の専門的な知識を身につけてほしいことやプレイセラピーの訓練を受けてほしいなど【キンダーカウンセラーの専門性向上への期待】が高まっている状況がみられた。

ⅰ）幼稚園における子育て支援の内容

以下に詳述する 4 つのカテゴリーが見出された。

（1）【コンサルテーション】

保育カウンセラーやキンダーカウンセラーによる【コンサルテーション】の普及がみられた。カウンセラーが＜保育観察＞や＜保育カンファレンスに参加＞したり、＜気になる子どもや障害のある子どものアセスメント＞をしていると同時に、＜幼稚園の組織全体へのアセスメント＞を実施および助言をしていた。

（2）【専門家や外部機関との連携】

カウンセラーが気になる子どもの理解と支援のための保育カンファレンスに参加することで、【専門家や外部機関との連携】が活性化し、カウンセラーが＜園内外の連携＞を深める＜橋渡しの機能＞を果たしていた。

（3）【日常での保護者支援】

保育者は、幼稚園での日々の子どもの様子を保護者へ伝え、＜保護者と情報を共有＞したり、職員全体で子どもの様子について共通理解をするようにしていた。また、カウンセラーの【日常での保護者支援】として、＜保護者に対する個別相談＞、＜情報発信＞、＜懇談会＞、＜保護者を対象とした子育てに関する講演会・学習会＞の実施などがあった。

（4）【未就園児の相談】

＜未就園児の保護者の育児＞において、保護者が孤立しがちな状況であることや＜園児確保の必要性＞から、幼児の就園事業として【未就園児の相談】といった保育事業を行っている園もあった。

ⅱ）幼稚園における子育て支援の課題

以下に詳述する 3 つのカテゴリーが見出された。

（1）【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】

保護者のニーズへ対応できているか気になるといったことや、子どもの保護者との良好な関係性を保てるように＜どのように保護者に子どもの状態を伝えたらよいか＞、＜保護者への対応の具体的な方法＞を知りたいといった、カウンセラーによる【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】がみられた。

（2）【子どもへの支援の充実】

一人ひとりの特別なニーズに合わせた【子どもへの支援の充実】の必要性を感じるが、＜時間的なゆとりがない＞ことから、＜子どもへの支援が十分でない＞気がしていたり、＜子どもの個の理解が十分でない＞気がするといった状況がみられた。

（3）【キンダーカウンセラーの専門性向上への期待】

キンダーカウンセラーは＜子どもの言動の特性や発達に関する知識＞や子どもと＜遊ぶ技術＞が必要であり、キンダーカウンセラーが、＜子どもの発達に関するより専門的な知識＞を持ち、＜プレイセラピーの訓練＞を受けるなどして、キンダーカウンセラーの専門性を向上させることが求められていた。また、キンダーカウンセラーによる＜保育観察＞、＜個別の指導計画への助言＞、＜子どものアセスメント＞はより一層実施を増やしてほしいとの希望がみられ、【キンダーカウンセラーの専門性向上への期待】がうかがえた。

3.3.3. こども園における子育て支援の内容と課題

こども園を対象とした 1 件の文献に関して「子育て支援の内容と課題」について分析したところ、子育て支援の内容については、こども園の考える子ども観や教育・保育観に基づいた活動が行われ

ているとともに、保育者を対象とした障害児への保育・教育や関わりについての研究、外部の専門機関からの支援など、保育者を支援するための取り組みがなされていた。その中でも、外部の専門機関からの支援の一つとして【巡回相談】があった。

一方、課題については、巡回相談の課題として、巡回相談の回数不足、相談内容の共有の困難さ、保育者の巡回相談員への依存がみられ、定期的に心理職が園に訪問・配置されるためには、既存の【巡回相談】などのシステムに心理職が積極的に関与し、【巡回相談のあり方の検討】が必要であることが見出された。

ⅰ）こども園における子育て支援の内容

以下に詳述する 1 つのカテゴリーが見出された。

（1）【巡回相談】

障害児保育が整備され始めており、保育者の加配、保育者を対象とした障害児への保育・教育や関わりについての研究、＜外部の専門機関からの支援＞など、保育者を支援するための様々な事業や取り組みがなされており、障害特性などの個別性に合わせた関わりを提供するシステムは様々な面で充実していくと考えられており、その中でも、＜外部の専門機関からの支援＞の一つとして【巡回相談】がみられた。

ⅱ）こども園における子育て支援の課題

以下に詳述する 1 つのカテゴリーが見出された。

（1）【巡回相談のあり方の検討】

巡回相談の課題として、＜巡回相談の回数不足＞、＜相談内容の共有の困難さ＞、＜保育者の巡回相談員への依存＞があり、【巡回相談のあり方の検討】が必要であった。＜巡回相談の回数不足＞については、巡回相談システムの事業主体により回数や予算が異なり、各園によって異なる状況がみられたが、そのような状況でも、できるだけ多くのクラス場面を観察することの意義が述べられた。＜相談内容の共有の困難さ＞については、園のサイズに関わらず保育に参加しながら観察を行った後、保育者との協議で関わりの方向性を決めていくやり方が意義のある方法であったことが示された。＜保育者の巡回相談員への依存＞については、コンサルティに対して同じ専門家として敬意を払いつつ、コンサルティ自身が自分の力で問題を解決できるように支援を行うという姿勢をとることが依存を防ぐ関係性に繋がるのではないかと述べられた。

3.3.4.　保育園と幼稚園における子育て支援の内容と課題

保育園と幼稚園を対象とした 7 件の文献に関して「子育て支援の内容と課題」について分析したところ、保育園と幼稚園における子育て支援の内容については、【巡回相談】を活用している園が多い傾向がみられ、専門家・専門機関との連携をしていることが見出された。また、地域に開かれた園が理想とされてきており、【日常での保護者支援】として園庭開放や未就園児保育、延長保育を実施する園が増えてきている傾向がみられた。【気になる子どもへの支援】については、マニュアル的な対応ではなく、一人ひとりに合った関わりの仕方を検討しながら支援していることが見出された。

一方、課題については、通常の保育以外に支援が必要な子どもや保護者が多く、特に保護者対応に問題を感じており、【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】がみられ、心理職からの専門的なアドバイスの必要性がみられた。また、個別的な支援が必要な子どもを支援するための【発達相談者の専門性向上への期待】がみられた。

ⅰ）保育園と幼稚園における子育て支援の内容

以下に詳述する 3 つのカテゴリーが見出された。

（1）【巡回相談】

＜コンサルテーション活動＞として【巡回相談】を活用している園は多く、臨床心理士などの＜専門家が園を訪問＞して、幼稚園教諭や保育士、保護者の相談に対応していることがみられ、＜専門家・専門機関との連携＞をしていることが見出された。

（2）【日常での保護者支援】

保育現場は保護者を対象とした子育て支援の場としての役割も担っており、＜園庭開放＞や＜未就園児保育＞が実施されたり、働く母親への支援として＜延長保育＞を実施する保育現場も増加傾向にあり、【日常での保護者支援】が日々行われていることがみられた。

（3）【気になる子どもへの支援】

【気になる子どもへの支援】の事例として、＜養育環境の問題を抱える事例＞と＜発達上の問題を抱える事例＞がみられた。＜情緒面に問題＞を抱える場合は、感情に寄り添ってもらうことを保育者との関わりを通して体験できるように接することが保育士の役割であると述べられた。＜発達の問題＞の場合は、＜発達段階にあわせた遊び＞をすることが大切であり、クラスでの全体活動にこだわらず、園全体の敷地を利用してその子どもの＜発達段階にあった遊び＞を提供することが大切であると述べられた。

ⅱ）保育園と幼稚園における子育て支援の課題

以下に詳述する 2 つのカテゴリーが見出された。

（1）【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】

通常の保育以外に支援が必要だと感じる子どもや保護者は多く、保育者は、特に＜保護者対応に問題＞を感じており、保護者と関わる中で感じる問題として、＜保護者と保育者の関係＞、＜子育てやしつけの問題＞、＜保護者自身の病気や悩み＞、＜保護者の意識や性格上の問題＞、＜子どもの情緒的な問題＞があった。また、保育者の＜カウンセリングに対するニーズ＞は年齢や勤務年数、役職に関わりなく高く、＜カウンセリング的な態度や聴き方・話し方＞を学びたい保育者が多いことがあげられた。＜心理士を活用したい＞保育現場は多く存在しており、心理職に求めることについては、＜子どものアセスメント＞や、教育・保育という視点以外となる＜心理学的な子どもの捉え方や関わり方＞、＜保護者への対応＞、＜保護者に対してカウンセリングを行って欲しい＞といった、【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】がみられた。

（2）【発達相談者の専門性向上への期待】

発達相談を担当するカウンセラーは個別的な支援が必要な子どもが一人ひとり持っている能力を十分に発揮しうるように支援をすることが必要であり、【発達相談者の専門性向上への期待】が高まっていた。また、保育現場がカウンセラーに臨む専門性は、＜親とのカウンセリング力＞、＜保育現場・学校現場を知っていること＞、＜子どもの育ちを理解していること＞、＜外部機関との連携＞などであった。

3.3.5. 保育園とこども園における子育て支援の内容と課題

保育園とこども園を対象とした 1 件の文献に関して「子育て支援の内容と課題」について分析したところ、子育て支援の内容については、【気になる子どもの保護者支援】として、保護者との関係づくりを重視しており、親への伝え方を工夫していることが見出された。

一方、課題については、【気になる子どもの保護者への支援の充実】が述べられ、気になる子どもの状態像に応じた保護者支援のあり方の検討の必要性がみられた。

ⅰ）保育園とこども園における子育て支援の内容

以下に詳述する 1 つのカテゴリーが見出された。

（1）【気になる子どもの保護者支援】

【気になる子どもの保護者支援】として、保護者への伝え方に悩みつつ、保護者との関係づくりを重視しており、親の話を傾聴しつつ親への伝え方を工夫していた。また、年長児に対しては、他の年齢に比べて小学校就学を見据えて関わっており、子どもの成長・発達について保育者が気にかけていることも指摘された。

ⅱ）保育園とこども園における子育て支援の課題

以下に詳述する 1 つのカテゴリーが見出された。

（1）【気になる子どもの保護者への支援の充実】

子育て支援の課題については、【気になる子どもの保護者への支援の充実】の必要性を感じるが、保育者の担う役割が増大している中、保育者は保護者支援に苦慮していることが指摘され、気になる子どもの保護者の支援のあり方、気になる子どもの状態像の違いによって保護者支援の仕方がどのように異なるかについての検討が課題としてあった。

3.3.6. 各保育現場における子育て支援の内容と課題に関する研究の傾向

3.3.1～3.3.5 で得られた子育て支援の内容と課題のカテゴリーについて、各保育現場で共通するカテゴリーや、独自のカテゴリーを整理することで、保育現場における子育て支援の内容と課題に関する全体的な研究の傾向を捉えた(Figure2,3)。

子育て支援の内容(Figure2)に関して、全ての保

育現場に共通するカテゴリーは①【専門家や外部機関との連携】と【巡回相談/コンサルテーション】と【気になる子どもの保護者支援】であった。保育園と幼稚園に共通するカテゴリーは②【日常での保護者支援】と【気になる子どもへの支援】であった。保育園のみのカテゴリーは③【保育士による心理相談業務】であった。幼稚園のみのカテゴリーは④【未就園児の相談業務】であった。また保育園とこども園共通のカテゴリー、幼稚園とこども園共通のカテゴリー、こども園のみのカテゴリーに該当するものはなかった（図中ーで示した部分）。

子育て支援の課題(Figure3)に関して、全ての保育現場に共通するカテゴリーは❶【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】であった。保育園と幼稚園に共通するカテゴリーは❷【心理職（キンダーカウンセラー、発達相談者）の専門性向上への期待】と【子どもへの支援の充実】であった。保育園のみのカテゴリーは❸【保育者への心理的支援の必要性】と【より多くの職種との連携の必要性】であった。保育園と子ども園に共通するカテゴリーは❹【巡回相談のあり方の検討】と【気になる子どもの保護者への支援の充実】であった。また幼稚園とこども園共通のカテゴリー、幼稚園のみのカテゴリー、こども園のみのカテゴリーに該当するものはなかった（図中ーで示した部分）。

Table1. 保育園を対象とした文献

研究者名（発表年）	研究目的	研究方法	対象者	分析項目	結果
井上ら[7]（2006）	カウンセリング研修のニーズに関する調査【カウンセリングの必要性の検討】	質問紙調査	557名（保育士227名、指導者330名）	独自の質問項目（カウンセリングに対する関心の度合い、カウンセリングの必要性を感じる場面、カウンセリングの研修について等）	・指導者層の方が保育現場におけるカウンセリングの技術や知識の必要性を感じていた。 ・カウンセリング研修の参加経験は、保育士層で有意に少なかった。 ・カウンセリング研修の参加希望は両層とも約９割であった。
阿部[8]（2013）	「気になる子どもを対象とした巡回相談」を受けた側の評価に基づき、巡回相談の効果と巡回相談のスタイルについての検討【コンサルテーションの検討】	質問紙調査	24名（保育所所長等）	独自の質問項目（巡回相談事業の効果をどのように保育所（園）として評価しているか、巡回相談スタイルに関するアンケート(保育観察、協議、アドバイス等)）	・複数の保育士で情報を共有する仕組みの提示、保育士の対応の肯定的な評価、保育士が気づいていない視点の提案、保育所（園）の実情に応じた訪問体制のアレンジ等が有効であると考えられた。
原口ら[9]（2013）	保育所における特別な配慮を要する子どもの支援に関する基礎資料を得る【発達障害や気になる子どもの支援の検討】	質問紙調査	421箇所（保育所）	独自の質問項目（特別な配慮を要する子どもの在籍状況、支援の実態、気になる子どもと障害児への支援の実施状況等）	・気になる子どもは約9割の保育所に1名以上、障害児は公立の77.9%に、私立の48.4%に1名以上在籍。全在籍児に占める割合は気になる子どもは4.6%、障害児は1.4%。早い時期から気になる子どもを把握しているが、障害児への支援に比較すると十分とは言えない。巡回相談、研修、専門機関との連携が多くの保育所で実施されているが、回数は不十分。
橋本[10]（2018）	保育現場における対話の場を通した気になる子の保護者支援のプロセスを、保育士の語りを通じて明らかにする【発達障害や気になる子どもの支援の検討】	面接調査	1名（保育士歴15年、女性）	独自の質問項目（O園における対話の場を通じた気になる子の保護者への支援の現状と課題に関して）	・対話の場を通して得られた「保護者と保育士の関係性の発展」や保育士の保護者に対する心情の気づきといった保育士個人の体験の蓄積が、結果として「若手保育士の気になる子どもの保護者支援力の向上」へと繋がり、保護者と専門機関との橋渡し機能が促進された。目標として、組織全体の保護者支援力の向上に関する課題と展望が語られた。
原口ら[11]（2018）	保育者からみた心理専門職との協働に関する認識を明らかにする【多職種連携の検討】	面接調査	6名（男性1名・女性5名）	独自の質問項目（心理職との協働経験や心理職への認識・ニーズと、発達検査などの認識・ニーズに関して）	・経験年数ごとに心理専門職に対する認識に違いがみられた。 ・ベテラン保育者は、心理専門職の見方を取り入れて、ある程度同じ見方ができるようになっていった。
中島ら[12]（2019）	保育現場の多職種連携の重要性について保育カウンセラーとの協働を通して検討する【多職種連携の検討】	内容分析	1園（保育園）	保育カウンセラーの活動についての実践報告	・今後より多くの職種との連携が求められることとなる可能性がある。 ・保育者と共に子どもや家族の育ちを見守り、支え、安心できる保育の環境を作っていくことが保育カウンセラーに求められる大切な役割である。

[7] 井上清子・石川洋子・会沢信彦. 子育て支援とカウンセリング（2）―埼玉県内の保育所を対象とした調査から―. 文教大学教育学部紀要, 2006, 40, p. 21-29.
[8] 阿部美穂子. 気になる子どもの保育における効果的な巡回相談スタイルの実践的検討－保育所（園）長アンケートの分析－. 富山大学人間発達科学部紀要, 2013, 7(2), p. 41-53.
[9] 原口英之・野呂文之・神山努. 保育所における特別な配慮を要する子どもに対する支援の実態と課題―障害の診断の有無による支援の比較―. 障害科学研究, 2013, 37, p. 103-114.
[10] 橋本翼. 保育所における「気になる子」の保護者支援の取り組みに関する一考察―保育者へのインタビュー調査を通して―. 近畿大学九州短期大学研究紀要, 2018, 48, p. 77-89.
[11] 原口喜充・大谷多加志. 保育者からみた心理専門職との協働―経験による変化と関係性に着目して―. 保育学研究, 2018, 56(3), p. 126-136.
[12] 中島卓裕・古川洋子. 保育の現場における多職種協働の実現に向けて―保育カウンセラーの活動についての実践報告―. 愛知学泉大学紀要, 2019, 1(2), p. 35-39.

Table2. 幼稚園を対象とした文献

研究者名（発表年）	研究目的	研究方法	対象者	分析項目	結果
大靏[13]（2008）	相談員としての活動の実践を報告と幼稚園での臨床心理的援助の検討 【相談員の役割の検討】	事例分析	1名（幼稚園での相談員の活動）	保育現場での活動報告	・活動の内容は①子どもの行動観察と直接的な関わり、②保育者への支援、③保護者への相談窓口。④研修会への参加、⑤情報提供であった。
吉川ら[14]（2009）	保育カウンセラーが参加するカンファレンスケースの子どもの問題背景の検討、コンサルテーション機能とカウンセラー役割の検討 【コンサルテーションの検討】	内容分析	8名（Z幼稚園職員・園長・主任・担任、保育カウンセラー）	担任より上げられたZ幼稚園における気になる園児とその保護者について	・園内カンファレンスにカウンセラーが入ることで、職員間・外部の専門機関との連携が活性化すること、障害受容という保護者への支援のあり方を検討できる場が保証されることが示された。
立本[15]（2010）	幼稚園における子育て支援における保育カウンセラーの在り方と、心理的・発達的支援のシステム構築を行う際の重要な事柄を得る 【保育カウンセラーの役割の検討】	質問紙調査	50名（A市の公立幼稚園に勤務する教諭）	独自の質問項目 （心理的・発達的支援に対する意識や現状、心理的・発達的支援のシステムにおける希望回数、心理的・発達的支援のシステムの内容について等）	・心理的・発達的支援のシステムに対しては肯定的な意識が大変高く、システムの良い内容は子どもの発達支援、気になる子どもの療育、保護者の育児相談、子育て支援における外部講師や保育者の保育相談であった。システムにおいて魅力を感じる点は教諭の専門性と保育の質の向上であった。
小川[6]（2014）	現在展開されているKC事業について、これまでの研究を概観し、KCの活動状況と他の活動との比較検討を行うことにより、KCの活動の現状分析を行う 【キンダーカウンセラーの役割の検討】	文献研究	10件（「キンダーカウンセラー」「キンダーカウンセリング」で検索）	文献内容の報告	・KCの名称は事業開始とほぼ同時期から用いられており、抽出されたのは2003年以降の文献であった。複数の文献から、KCの費用・経済的側面による活動回数の少なさ、認知度の低さ等があげられた。 ・保育・幼児教育の現場はそれぞれ特徴があり同じものではなく、様々な地域・環境などの背景をも考慮すると、一つの型にはめることは危険であり統一する必要はないと考えられた。
原口[16]（2017）	保育カウンセリングの支援のプロセスと保育者支援の具体的な方法について考察する 【保育カウンセラーの役割の検討】	事例研究	１園（筆者が関わる私立幼稚園）	保育現場での事例報告	・「共に抱える」「見立てを伝え共に検討する」「見守る」という3つの段階的な支援のプロセスと、それぞれの段階における支援方法やポイントが示された。
大西ら[17]（2018）	発達障害への対応をKC導入の目的としている幼稚園での活動事例を基に発達障害への早期支援に関してのKCの役割について考察する 【キンダーカウンセラーの役割の検討】	内容分析	1園（筆者がKCとして配属されている私立A幼稚園）	年度ごとの利用件数、月ごとの利用件数、利用者の内訳、相談内容、活動形態、対象児の年齢	・発達領域への活動内容に大きな偏りがあり、付随して利用対象者は教員の割合が他より高く、手法も保護者の個別面接より教員との情報交換やコンサルテーション、および園児の直接観察やアセスメントにより高い稼働率が認められた。
日光[18]（2018）	キンダーカウンセラー事業を実施中の私立幼稚園の事業状況、今後の期待、気になる子どもの保育に対する教師の効力感、キンダーカウンセラー事業の効果について検討する 【キンダーカウンセラーの役割の検討】	質問紙調査	126名（大阪府キンダーカウンセラー事業を実施する126園の教師）	独自の質問項目 （キンダーカウンセラー事業の実施状況及び今後の期待、キンダーカウンセラー事業を実施されての効果の実感、気になる子どもの保育に対する教師の効力感）	・キンダーカウンセラー事業は「保育観察」「保育カンファレンス」「子どものアセスメント」が実施されていた。あまり実施されていなかった支援は「地域の子育て家庭へのカウンセリング」「子育てに関する講演」「地域の専門機関の紹介、連携」。今後期待する支援については「保育観察」「個別の指導計画への助言」「子どものアセスメント」であった。
下温湯[19]（2020）	母親が子どもの発達を心配する事例を取り上げ、カウンセリングにままごとを取り入れた相談の効果について検討する 【発達障害や気になる子どもの支援の検討】	事例研究	3事例（未就園児クラスに通う2歳児とその母親）	独自の質問項目 （母子の関係、認知・行動の発達、言葉の発達、社会性の発達、母親の子ども理解）	・カウンセリング後、母親にとっては育児の孤立感が和らぎ、子ども理解の視点ができ、対応の具体的なヒントが得られた。 ・遊び体験が子どもの発達を促し、わずかな時間でも変容が見られた。

[6] 小川恭子. キンダーカウンセラー活動の現場―研究動向と今後の課題について. 花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要, 2014, 8, p. 41-49.
[13] 大靏香. 保育現場を支援する臨床心理的活動－附属幼稚園における相談員としての実践から－. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 2008, 3, p. 235-246.
[14] 吉川昌子・松尾智則・淵上乃里子・尾恒素子・片山瞳・早川公美子・林希・樋渡紗由理. 保育現場で「気になる」子どもの理解と支援のための一考察―保育者と保育カウンセラーによるコンサルテーションを通して―. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 2009, 41, p. 161-173.
[15] 立本千寿子. 幼稚園における心理的・発達的支援のシステム構築について―A 市において保育カウンセラーが果たせる役割の検討―. 鳴門生徒指導研究, 2010, 20, p. 30-41.
[16] 原口喜充. 保育カウンセリングにおける保育者支援の方法とプロセスに関する一考察. 心理臨床学研究, 2017, 35(5), p. 503-513.
[17] 大西貴子・國久美代子. 幼児期の発達障害支援におけるキンダーカウンセラーの役割.　次世代教員養成センター研究紀要, 2018, 4, p. 45-52.
[18] 日光恵利. キンダーカウンセラー事業による継続的な支援についての効果の実感―気になる子どもに対する保育効力感に着目して―. 幼年児童教育研究, 2018 ,30, p. 29-36.
[19] 下温湯まゆみ. キンダーカウンセリングにおける子育て支援：ごっこ遊びを取り入れた２歳児と母親の発達相談. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 2020, 10, p. 103-112.

Table3. こども園を対象とした文献

研究者名（発表年）	研究目的	研究方法	対象者	分析項目	結果
中山ら[20]（2019）	子ども園でのコンサルテーションの実践報告を通し、臨床心理士による巡回相談のあり方について検討する 【コンサルテーションの検討】	事例研究	1園（筆者らが定期的に訪問しているAこども園）	Aこども園でのコンサルテーションの実践報告	・巡回相談の回数不足や相談内容の共有の困難さ、保育者の巡回相談員への依存といった課題に対して、方法を工夫したコンサルテーションを実施した結果、コンサルタントのアドバイスを保育者が取り組んだ対応方法により子ども達の行動が変化していった。

[20] 中山政弘・中津濱瑠美. 教育相談としての認定こども園カウンセラーのあり方―コンサルテーションによる支援の試み―. 福岡県立大学心理臨床研究, 2019, 11, p. 43-58.

Table4. 保育園と幼稚園を対象とした文献

研究者名（発表年）	研究目的	研究方法	対象者	分析項目	結果
石川ら[21]（2005）	保育所や幼稚園等子育て支援の現場におけるカウンセリングに対するニーズの検討 【カウンセリングの必要性の検討】	質問紙調査	121名（子育て支援講座参加者女性117名・男性4名）	独自の質問項目 （保護者の問題とその対応、カウンセリングに対する具体的ニーズ等）	・特に保護者対応に問題を感じ、カウンセリングに対するニーズは高い。 ・カウンセリングの研修会の情報や機会がない。研修会参加者が、参加していない者よりも外部の専門家や機関に相談することができていた。
井上ら[22]（2007）	保育所や幼稚園に勤務する保育者を対象として、保育者が感じている保育現場における問題とカウセリング研修のニーズの検討 【カウンセリングの必要性の検討】	質問紙調査	92人（子育て支援講座参加者のうち、保育所・幼稚園勤務者女性90名・男性2名）	独自の質問項目 （子ども・保護者と関わる中で感じる問題や困難、困難を感じた時に主に相談する相手、カウンセリングに対する関心の度合い、仕事上でカウンセリングを学ぶ必要性を感じる度合い等）	・子どもの問題として「子どもの情緒や行動上の問題」「基本的生活習慣やしつけの問題」が多かった。保護者の問題として「保護者と保育者の関係」「子育てやしつけの問題」「保護者自身の病気や悩み」「保護者の意識や性格上の問題」が多かった。 ・「日常での保護者との関わり」「特別な保護者との関わり」でカウンセリングを学ぶ必要性を感じていた。
立本[23]（2009）	保育現場の課題を明らかにし、相談・支援機能の現状と保育カウンセラーの可能性、保育カウンセラーに求められている役割を検討する 【保育カウンセラーの役割の検討】	質問紙調査	・191箇所（X県下の保育現場） ・168箇所（最初の調査で協力した保育現場）	・独自の質問項目 （保護者からの子育て支援の要望、通常の保育以外に支援が必要な子ども、支援が必要だと感じる保護者、子どもへの対応の難しさ、保育カウンセラーの希望度合い、保護者からの相談等）	・保育現場の子育て支援ニーズは高く、対応の難しさは親を対象としたものが大きい。働く親への支援、孤立した育児、育児の行き詰まりへの支援があがった。 ・通常保育以外に支援が必要な子どもや保護者が多いこと、そうした子どもや保護者への対応に難しさを感じている保育者が多かった。
佐伯[24]（2010）	保育現場における発達相談の意義と課題について考察する 【発達障害や気になる子どもの支援の検討】	内容分析	障害児保育と発達相談の歴史、発達相談の方法	保育現場の報告	・発達相談者は支援が必要な子どもの能力を発揮できるように保育者や保護者等と指導方針を作成していくことが求められる。そのため、発達相談者の専門性を向上させる必要があり、養成システムの確立が望まれ、発達相談者の国家資格化を検討することも必要であると考えられた。
滝口ら[25]（2012）	保育カウンセリングを概観し、実際の保育カウンセリングを紹介しつつ、保育カウンセリングの今後に向けて考察する 【保育カウンセラーの役割の検討】	内容分析	保育カウンセリングの歴史、現場の報告	保育現場の報告	・日野市の保育カウンセラーは、保育を理解する、アセスメントと個別相談、保護者を対象とする講演会、保護者への保育カウンセラーからのメッセージ、保育者とのカンファレンス、他機関との連携、地域社会への子育て支援を行なっていた。保育カウンセリングの課題として、保育カウンセラーの配置、保育カウンセラーの養成と研修、専門家間の連携、保育カウンセリングの経験の蓄積があげられた。
寺井[26]（2016）	保育現場での気になる子どもへの支援の現状と今後の課題を検討する 【発達障害や気になる子どもの支援の検討】	質問紙調査	104名（保育園・幼稚園に勤務する保育士・幼稚園教諭）	独自の質問項目 （気になる子の存在、気になる内容と原因、気になる子どもの理解を深めるために希望する研修内容と研修形態等）	・「気になる子どもの内容」では情緒面の問題があげられた。 ・「保育士が希望する研修内容」では保護者との関係に苦慮しているものがあがった。「保育士が希望する研修形態」では「努力する」といった曖昧なものが多く、具体的な研修体験をして学びを深める必要性が指摘された。
中山ら[27]（2017）	幼稚園・保育園で臨床心理士が活用されるためにどのような役割を持つことができるのかを明らかにする 【臨床心理士の役割の検討】	質問紙調査	299名（幼稚園・保育園に勤務する保育士・幼稚園教諭）	独自の質問項目 （臨床心理士の園での勤務状況、臨床心理士等への相談の有無、臨床心理士へのニーズ等）	・臨床心理士への期待として、子どもの能力のバランスやコミュニケーションのアセスメント、教育・保育という視点以外となる心理学的な子どもの捉え方や関わり方、保護者への対応や保護者に対して臨床心理士によるカウンセリングを行って欲しい、外部との連携という希望がみられた。

[21] 石川洋子・井上清子・会沢信彦. 子育て支援とカウンセリング（1）―保育者のカウンセリングに対するニーズを中心に―. 文教大学教育学部紀要, 2005, 39, p. 51-62.
[22] 井上清子・石川洋子・会沢信彦. 保育者が感じている問題とカウンセリングニーズ. 文教大学生活科学研究, 2007, 29, p. 61-69.
[23] 立本千寿子. 保育現場における臨床心理学的課題と要望に対する基礎調査―相談・支援機能の現状と保育カウンセラーの可能性―. 鳴門生徒指導学会, 2009, 19, p. 2-13.
[24] 佐伯文昭. 保育所における発達相談―今日的意義と課題―. 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要, 2010, 13, p. 87-94.
[25] 滝口俊子・下川和子. 保育カウンセリングをめぐる一考察. 立教女学院短期大学紀要, 2012, 44, p. 71-77.
[26] 寺井弘美. 保育現場が行う「気になる子どもへの支援」の現状と課題――保育士の意識調査と事例検討会から見えてきたこと. 子育て支援と心理臨床, 2016, 11, p. 6-12.
[27] 中山政弘・山下雅子・森夏美. 幼稚園・保育園における臨床心理士のニーズについて～発達・教育相談の視点から～. 福岡県立大学心理臨床研究, 2017, 9, p.49-56.

Table5. 保育園と子ども園を対象とした文献

研究者名（発表年）	研究目的	研究方法	対象者	分析項目	結果
齊藤ら[28]（2008）	気になる子どもの保護者への支援の実態や、架空ケースを提示し、その見立て方や保護者支援の仕方について検討する 【発達障害や気になる子どもの支援の検討】	質問紙調査	176名（49園の保育所・認定こども園の保育者）	独自の質問項目 （気になる子どもとその保護者支援の実態、架空ケースにおける気になる子どもとその保護者支援に関すること、保育カウンセラーに求めるもの）	・96.6%の保育者が「気になる」子どもを保育した経験があった。 ・5～6歳児の保護者との関わりで「意識等の食い違い」が生じたり、「伝えて関係悪化」したりすることが他の年齢に比べて多いという回答結果があった。架空ケースでは、保育者は保育環境からケースを振り返り、保護者との関係づくりに重点を置いていた。

[28] 齊藤愛子・中津郁子・粟飯原良造. 保育所における「気になる」子どもの保護者支援―保育者への質問紙調査より―. 小児保健研究, 2008, 67(6), p. 861-866.

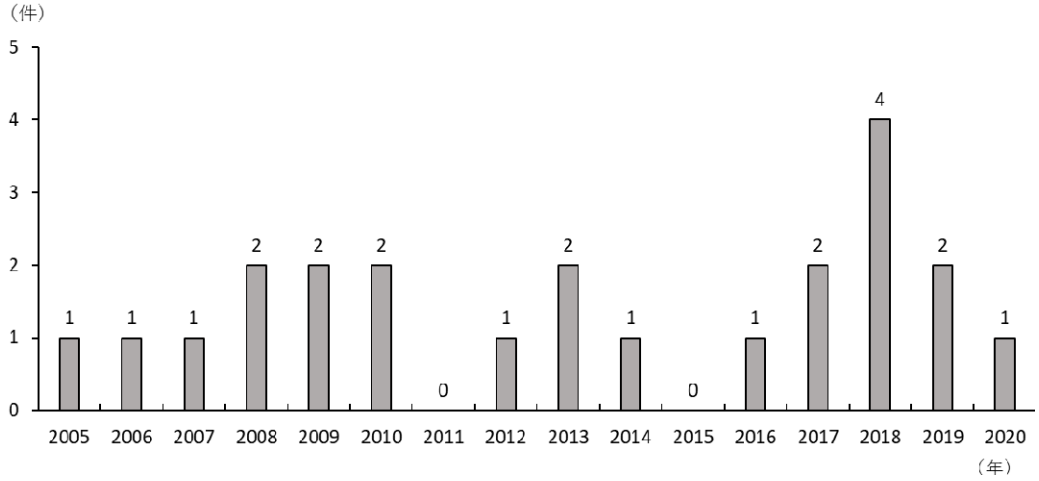

Figure1.　保育現場における子育て支援に関する文献の年次推移

Table6. 研究目的

発達障害や気になる子どもの支援の検討	6
保育カウンセラーの役割の検討	4
コンサルテーションの検討	3
カウンセリングの必要性の検討	3
キンダーカウンセラーの役割の検討	3
多職種連携の検討	2
臨床心理士の役割の検討	1
相談員の役割の検討	1
計	23（件）

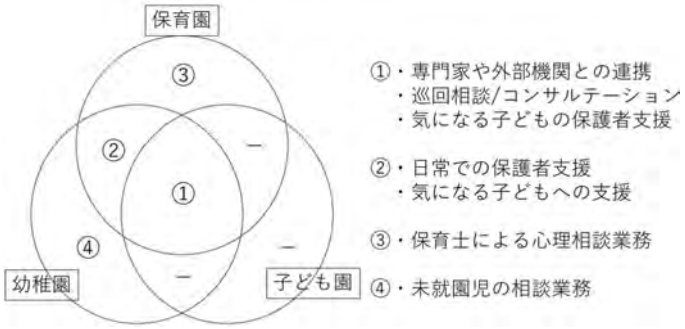

Figure2. 保育現場における子育て支援の内容に関する研究の傾向

Table7. 研究方法

量的研究	11
質的研究	7
事例研究	4
文献研究	1
計	23（件）

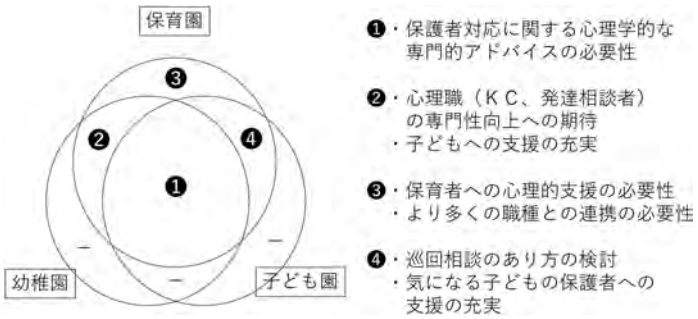

Figure3. 保育現場における子育て支援の課題に関する研究の傾向

4．考察

4.1. 研究の動向について

研究対象の場所については、保育園を対象とした文献が 6 件、幼稚園を対象とした文献が 8 件、保育園と幼稚園ともに対象とした文献が 7 件、子ども園および保育園と子ども園を対象にした文献はそれぞれ 1 件であり、保育園および幼稚園に関する研究が 9 割以上を占めていた。2006 年 10 月から「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」が施行され、認定こども園制度が始まったため、こども園を対象とした研究の数は少ない。

発表年次に関しては、2005 年から始まり、その後、継続的に 1~2 件発表され、2018 年に 4 件と最も多く発表されていた。2004 年に保育カウンセラーの導入の提案がなされ、同年、試行的に日野市内の一部の公立幼稚園に配置されることになるなど、保育現場での子育て支援の必要性が一層取り上げられるようになり、このような流れから保育現場における子育て支援に関する研究活動もみられ始めるようになったと考えられた。

研究目的については、発達障害や気になる子どもの支援の検討が最も多く 6 件であった。このことは、2005 年から「発達障害者支援法」が施行され、保育現場では発達支援に関するニーズが年々高まっていることからもうかがえた。また、保育カウンセラーの役割の検討（4 件）、キンダーカウンセラーの役割の検討（3 件）、臨床心理士の役割の検討（1 件）、相談員の役割の検討（1 件）と、それぞれの心理職に関する役割の検討を合計すると 9 件あり、またそれぞれの結果からも、心理職に対する期待が高まっていることがうかがえた。さらに、コンサルテーションの検討やカウンセリングの必要性の検討がそれぞれ 3 件あり、子育て支援に関するより一層の専門的知識が保育現場において求められていることが示唆された。

4.2. 子育て支援の内容と課題について

子育て支援の内容に関して、全ての保育現場でみられる内容として、【専門家や外部機関との連携】、【巡回相談/コンサルテーション】、【気になる子どもの保護者支援】があげられた。このことは、研究目的で発達障害や気になる子どもの支援の検討が最も多かったことからも考えられるように、保育現場では発達支援のニーズが年々高まっており、発達支援や気になる子どもとその保護者に対する取り組みを積極的に行っていることが明らかとなった。障害児や気になる子どもとその保護者を支援するために、心理職と保育士が協働することで、園全体の職員間や外部専門機関との連携が活性化することが指摘されており[23]、園の組織全体の機能促進に繋がっていることが示唆された。

次に、保育園と幼稚園でみられる子育て支援の内容として、【日常での保護者支援】と【気になる子どもへの支援】があげられた。このことから、発達障害や気になる子どもの保護者に限定されることなく、全ての保護者に対して日常的な支援を行っていることが明らかになった。例えば、園庭開放や未就園児保育、延長保育や育児相談業務[23]などを実施する園が増えてきている傾向がみられた。また、気になる子どもへの支援については、個別の関わりの仕方を検討しながら支援していることがあげられ[23]、一人ひとりに合った適切な関わりを模索しながら保育活動を行っていることが示唆された。

保育園でのみ、あげられた内容は【保育士による心理相談業務】であった。特に指導者層が心理相談業務に関わることが多い傾向があり[7]、ベテランの保育士が必要性に応じて対応していると考えられた。また、幼稚園でのみ、あげられた内容は【未就園児の相談業務】であった。幼稚園によっては園児確保の必要性があったり、未就園児の保護者の育児が孤立しがちであることから[19]、早期から未就園児の保護者の支援を行っていると考えられた。

子育て支援の課題に関しては、全ての保育現場でみられる課題として、【保護者対応に関する心理学的な専門的アドバイスの必要性】があげられた。通常の保育以外にも支援が必要であると感じる子どもや保護者が多く[7]、特に保護者対応に苦慮している状況が見受けられた。どのように子どもの状態を保護者に伝えるべきか具体的な方法や伝え方を知りたいといった専門的なアドバイスを必要としている状況が明らかとなり、心理職の専門性が求められている課題であるといえよう。

次に、保育園と幼稚園でみられる子育て支援課題として、【心理職（キンダーカウンセラー、発達相談者）の専門性向上への期待】と【子どもへの支援の充実】があげられた。保育現場ではキンダ

ーカウンセラーや保育カウンセラー、発達相談者など様々な心理職の活動がみられるようになり、そのような状況の中で、子どもの発達に関するより一層の専門的な知識や遊ぶ技術が求められ[19]、心理職の専門性の高さを期待する傾向がみられた。また、時間的なゆとりがないことで子どもへの対応が十分にできないといった保育現場の厳しい状況からも、心理職が心理学的な専門性を活かしながら、より一層子どもへの支援に積極的に関わる事で、より充実した子ども支援が可能になることが示唆された。

保育園と子ども園でみられる子育て支援の課題として、【巡回相談のあり方の検討】と【気になる子どもの保護者への支援の充実】があげられた。巡回相談は、地域によって多様なスタイルで展開されており統一性がないことや、頻度が少なく専門家が保育者へ教授するという一方通行の関わりとなることが多いことなどが課題としてあげられ[8]既存の巡回相談のシステムに心理職が積極的に関与しながら、より良い巡回相談のあり方を検討する必要があることがわかった。このことは、小川[6]が述べているように、保育現場はそれぞれの特徴があり、地域・環境などの背景も考慮すると一つの型にはめる必要はないが、各保育現場のニーズに応じた適切な巡回相談のあり方を検討することが重要であると考えられた。また、気になる子どもの保護者への支援の充実については、気になる子どもは外部の専門機関に繋がりにくいという状況があり[9]、保育現場において早期に気づくことができたとしても、その後の対応が遅れてしまうといった状況がみられた。子育て支援の内容において、全ての保育現場において気になる子どもの保護者支援については取り組まれている状況がみられたが、特に保育園と子ども園では、より一層の支援の充実が必要であることが明らかとなった。この課題は、心理職が協働して取り組むことができる課題であると考えられるため、気になる子どもの状態像に応じた保護者支援のあり方など、巡回相談などのコンサルテーションの場において保育現場の職員とともに検討できるのはないかと考えられた。

保育園でのみ、あげられた内容は、【保育者への心理的支援の必要性】と【より多くの職種との連携の必要性】であった。保育士が行っている効果的な内容について肯定的な評価を行うことで保育士自身の自己肯定感を高めたり、保育者の心理的負荷を軽減する支援を検討したりすることは、心理職の重要な役割のひとつであると考えられた。また、より多くの職種との連携の必要性が課題としてあげられたことは、既存の職員だけでは対処することが困難な課題があることがうかがえ、今後、心理職は必要不可欠な存在となることが示唆された。

最後に、これまで述べてきた保育現場における子育て支援の内容と課題を振り返ると、心理職は様々な形で保育現場に関わっているとともに、より一層の連携を期待されていると考えられ、保育現場において心理職が貢献することができる役割は大きいといえよう。現在、保育現場には外部から保育カウンセラーやキンダーカウンセラー、発達相談員、臨床心理士や臨床発達心理士など様々な心理職が訪問し、協働・連携が広がりをみせている。しかしながら、心理職の配置は全国的に普及していないのが現状である。したがって、心理職は保育現場で求められていることを把握するとともに、専門的知識を活かし協働できることを積極的に提案し、実際に共に課題に取り組むといった実践活動を積み重ねていく必要があると考えられた。

謝辞

本研究は令和 3 年度 大妻女子大学人間生活文化研究所　共同研究プロジェクトの研究助成を受けて行われた（K2115　研究代表：田中優）。また文献研究にあたって協力をいただいた、大妻女子大学大学院臨床心理学専攻修了生の宗杏佳音さんに心より感謝の意を表する。

引用文献

[1] 大日方重利・蒔崎清子. キンダーカウンセリングの実践と課題－幼稚園・保護者・カウンセラーの連携. 人文学部紀要, 2010, 30, p. 173-183.
[2] 安屋周一・邨橋雅広・菅野信夫・辻河優. 大阪府私立幼稚園連盟におけるキンダーカウンセリング事業の利用効果. 日本保育学会第 57 回大会発表論文集, 2004, p. 676-677.
[3] 竹中美香. 幼稚園におけるキンダーカウンセラーの役割に関する研究－アンケート調査からみたキンダーカウンセラー事業のあり方. 東大阪大学・東大阪短期大学部教育研究紀要, 2008, 6, p.

9-17.
[4] 菅野信夫. 京都府私立幼稚園連盟キンダーカウンセラー派遣事業. 子育て支援と心理臨床, 2011, 4, p. 59-63.
[5] 富田久枝編著. 保育カウンセリングの原理. ナカニシヤ出版, 2009.
[6] 小川恭子. キンダーカウンセラー活動の現場—研究動向と今後の課題について. 花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要, 2014, 8, p. 41-49.
[7] 井上清子・石川洋子・会沢信彦. 子育て支援とカウンセリング（2）—埼玉県内の保育所を対象とした調査から—.文教大学教育学部紀要, 2006, 40, p. 21-29.
[8] 阿部美穂子. 気になる子どもの保育における効果的な巡回相談スタイルの実践的検討－保育所（園）長アンケートの分析－. 富山大学人間発達科学部紀要, 2013, 7(2), p. 41-53.
[9] 原口英之・野呂文之・神山努. 保育所における特別な配慮を要する子どもに対する支援の実態と課題—障害の診断の有無による支援の比較—. 障害科学研究, 2013, 37, p. 103-114.
[10] 橋本翼. 保育所における「気になる子」の保護者支援の取り組みに関する一考察—保育者へのインタビュー調査を通して—. 近畿大学九州短期大学研究紀要, 2018, 48, p. 77-89.
[11] 原口喜充・大谷多加志. 保育者からみた心理専門職との協働—経験による変化と関係性に着目して—. 保育学研究, 2018, 56(3), p. 126-136.
[12] 中島卓裕・古川洋子. 保育の現場における多職種協働の実現に向けて—保育カウンセラーの活動についての実践報告—. 愛知学泉大学紀要, 2019, 1(2), p. 35-39.
[13] 大鶴香. 保育現場を支援する臨床心理的活動－附属幼稚園における相談員としての実践から－. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 2008, 3, p. 235-246.
[14] 吉川昌子・松尾智則・淵上乃里子・尾恒素子・片山瞳・早川公美子・林希・樋渡紗由理. 保育現場で「気になる」子どもの理解と支援のための一考察—保育者と保育カウンセラーによるコンサルテーションを通して—. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 2009, 41, p. 161-173.
[15] 立本千寿子. 幼稚園における心理的・発達的支援のシステム構築について—A 市において保育カウンセラーが果たせる役割の検討—. 鳴門生徒指導研究, 2010, 20, p. 30-41.
[16] 原口喜充. 保育カウンセリングにおける保育者支援の方法とプロセスに関する一考察. 心理臨床学研究, 2017, 35(5), p. 503-513.
[17] 大西貴子・國久美代子. 幼児期の発達障害支援におけるキンダーカウンセラーの役割.　次世代教員養成センター研究紀要, 2018, 4, p. 45-52.
[18] 日光恵利. キンダーカウンセラー事業による継続的な支援についての効果の実感—気になる子どもに対する保育効力感に着目して—. 幼年児童教育研究, 2018 ,30, p. 29-36.
[19] 下温湯まゆみ. キンダーカウンセリングにおける子育て支援：ごっこ遊びを取り入れた２歳児と母親の発達相談. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 2020, 10, p. 103-112.
[20] 中山政弘・中津濱瑠美. 教育相談としての認定こども園カウンセラーのあり方—コンサルテーションによる支援の試み—. 福岡県立大学心理臨床研究, 2019, 11, p. 43-58.
[21] 石川洋子・井上清子・会沢信彦. 子育て支援とカウンセリング（1）—保育者のカウンセリングに対するニーズを中心に—. 文教大学教育学部紀要, 2005, 39, p. 51-62.
[22] 井上清子・石川洋子・会沢信彦. 保育者が感じている問題とカウンセリングニーズ. 文教大学生活科学研究, 2007, 29, p. 61-69.
[23] 立本千寿子. 保育現場における臨床心理学的課題と要望に対する基礎調査—相談・支援機能の現状と保育カウンセラーの可能性—. 鳴門生徒指導研究, 2009, 19, p. 2-13.
[24] 佐伯文昭. 保育所における発達相談—今日的意義と課題—. 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要, 2010, 13, p. 87-94.
[25] 滝口俊子・下川和子. 保育カウンセリングをめぐる一考察. 立教女学院短期大学紀要, 2012, 44, p. 71-77.
[26] 寺井弘美. 保育現場が行う「気になる子どもへの支援」の現状と課題——保育士の意識調査と事例検討会から見えてきたこと. 子育て支援と心理臨床, 2016, 11, p. 6-12.
[27] 中山政弘・山下雅子・森夏美. 幼稚園・保育園における臨床心理士のニーズについて～発達・教育相談の視点から～. 福岡県立大学心理臨床研究, 2017, 9, p.49-56.

[28] 齊藤愛子・中津郁子・粟飯原良造. 保育所における「気になる」子どもの保護者支援―保育者への質問紙調査より―. 小児保健研究, 2008, 67(6), p. 861-866.

（受付日：2021 年 11 月 12 日，2021 年 12 月 2 日）

春日　文（かすが　あや）
現職：大妻女子大学人間関係学部人間関係学科社会・臨床心理学専攻常勤特任講師

白百合女子大学大学院文学研究科発達心理学専攻博士課程修了。臨床心理士・公認心理師。
専門は臨床心理学・生涯発達心理学。母子関係や子どもの発達などをメインテーマにした研究を行っている。
主な著書：歌と絵本が育む子どもの豊かな心－歌いかけ・読み聞かせ子育てのすすめ―（ミネルヴァ書房）